

学校体育におけるゴール型の教材づくりの探究

—発達段階を見通した「誇張」の視点からの検討—

安部想史（信州大学大学院）

1. 目的

子どもたちの発達段階に応じた「ゴール型」の教材づくりの指針を提案するためには、ゲームにおける「意思決定」の視点から教材づくりを検討する必要がある。そこで本研究では、ゲームにおける「意思決定」に着目して教材づくりを行ってきている岩田の教材づくりに焦点を当て、岩田が『みんなでチャンスを作り、選ぶ』ことを軸にした役割行動と空間的、技能的発展（岩田、2009）という「ゴール型」の発展的なイメージを持ちながら開発してきた教材群を分析し、とりわけ「意思決定」の「契機」と「対象」の観点から、それらの教材群の中に埋め込まれている教材づくりの論理を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

①本研究では、「ゴール型」の学習を対象とする。その前提として、2008（平成 20）年の学習指導要領におけるボール運動系領域の改訂の要旨を整理する。また、内容改訂の理論的背景にあると考えられる欧米圏の「戦術中心の指導アプローチ」の考え方を確認する。

②やさしい教材を提供するために必要な視点について明らかにするために、2008（平成 20）年の学習指導要領改訂以降、その解説によって強調されたやさしい教材づくりについて記述するとともに、欧米圏の「ゲーム修正論」について確認する。

③教材づくりを進めるためには、子どもたちにとっての難しさを前提にする必要がある。そのため、研究対象となる「ゴール型」の難しさについて取り上げる。また、体育科教育分野における中心的な教育専門誌である「体育科教育」誌に1998（平成 10）年以降に報告された「ゴール型」の実践論文を対象にして、近年にみられる我が国の「ゴール型」の教材づくり（ゲーム修正）の方法と意図・視点についての一般的傾向を分析し整理する。

④発達段階を見通した「ゴール型」の教材づくりの指針を導き出す上で必要な段階について明らかにするために、岩田がこれまで「ゴール型」の教材づくりに用いてきた「誇張」の一つの方法論である「明示的誇張」について確認する。また、ボール運動系

の系統的発展について、「戦術的複雑さ」の観点から記述しているグリフィンら（1997）、岩田（2009）の指摘から検討する。

⑤岩田（2009）が示した、「ゴール型」の教材づくりの発展的なイメージの具体像を、岩田らが開発してきた教材群を対象に「意思決定」の「契機」と「対象」の観点から分析、構造化して岩田の教材群の背景にある「ゴール型」の教材づくりの論理をその系統性の観点から明らかにする。

3. 結果と考察

岩田（2009）の「ゴール型」の教材づくりの発展的なイメージには、少なくとも（1）「『シュート』を中心とした学習の累積化」、（2）「入り乱れの条件の柔軟な変更」、（3）「『ボールを持たないときの動き』の要求度」に着目した教材づくりの論理があると解釈された。

（1）は、「シュート」を学習の中心に、学習を積み重ねていくことである。

（2）は、「攻守のプレイヤーが入り交じらない」状況などを柔軟に設定することで、学習対象として取り上げるべき「意思決定」の「対象」がクローズアップされる場面を創出することである。

（3）は、「ボールを持たないときの動き」の要求度をゲーム条件によって操作することである。また同時に、それはゲームにおける空間利用や技能の選択に関わって「ボール操作の技能」の要求度も操作することでもある。

4. 結論

発達段階を見通した「ゴール型」の教材づくりを行うには、ゲームにおける「戦術的複雑さ」に着目して「意思決定」の「契機」と「対象」を段階的に複雑化させるとともに、上記の（1）（2）（3）の論理について検討していくことが重要な指針になるであろう。

5. 主な参考文献

1) 岩田靖（2016）ボール運動の教材を創る，ゲームの魅力をクローズアップする授業づくりの探究，大修館書店，pp. 1-72